



JICA九州の研修員受入事業

JICA九州では、年間約100コース、約700人の研修員を受け入れている。研修の分野は、環境、保健、地域開発(一村一品など)、水道、IT、中小企業支援など多岐にわたる。JICA九州国際センター(福岡県北九州市八幡東区)には宿泊施設が併設されており、常時約30~140人の研修員が生活している。研修員と市民の交流プログラムも随時実施。問い合わせ: JICA九州 TEL:093-671-6311(代表)

研修員の生の声を伝えたい

「JICAの研修員の生の声を、一般の人に聞いてもらおう!」すべては今年2月、JICA九州に来た2人のインターン生の声から始まった。研修業務課の配属となった彼らは、担当の稲垣良隆職員から「JICAの研修員受入事業を広報せよ」というミッションを与えられた。「2週間のインターン、何か目標になるものがあればと思ったんです」と稲垣職員。「あと、学生にはとにかくパワーがある。何か面白いことをやってくれるのではないかと期待がありました」。彼自身も日々の業務の中で、どうすれば研修員受入事業をより多くの人に知ってもらえるかを模索していたところだった。

インターン生の一人、九州大学21世紀プログラム課程3年の山内優希さんは沖縄県出身。高校時代に10カ月間フィリピンの高校に留学した時、日常で貧富の差を目の当たりにした。「現実を知ってしまったからには、私も何かしなければと思ったんです」。JICA九州のインターンも「いずれは国際協力の分野に携わりたい」という思いから応募した。インターン期間中、もう一人のインターン生、立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部4年の足立伸也



講演をしたホンジュラスの研修員、ウマーニヤさん(左)。「日本という国の美しさ、人々の勤勉さに驚きました。日本で学べることを誇りに思います」

研修を支えよう

JICAの研修員受入事業は、北は北海道から南は沖縄まで、全国17カ所にあるJICAの国内機関が主導で実施している。しかしどの地域でも、まだまだ研修の存在を知らない人が多いのが現実。そこで、この事業を多くの人に知ってもらうため、JICA九州のインターン生が立ち上がった。

九州地方

地域ぐるみで



第2部では国際協리에興味を持つ学生たちが活発な議論を行った



インターン中に同行した研修の視察先電源開発(株)若松総合事務所に



参加団体の一つ、福岡大学のサークル「アフリカくらぶ」の活動紹介。エコキャップ回収運動など、さまざまな取り組みを実施している

さんと山内さんは、どうすれば皆に研修を知ってもらえるか、毎日のように議論した。「ポスターを作る」「キヤッチコピーを作る」など意見を出し合ったが、どれもしっくりこない。悩みに悩んだ挙句、足立さんがこう言った。「研修員の話聞くことが、何よりもインパクトがあるんじゃないか」。研修員の生の声、これが2人のキーワードになった。そうだ、研修員を招いて交流イベントを企画しよう。話はトントン拍子に進み、開催日は4カ月後の7月11日、会場は九州大学に決まった。同大学の山内さんを中心とした、一大プロジェクトが始まった。

国際協力の出会いの場となるイベントに

当初の目的は、JICAの研修員受入事業を広めること。しかし山内さんは、企画を進める中で、そこにもう一ひねり加えられないかと考えた。参加者にとつて、メリットとなるイベントでなければ意味がない。そこで思いついたのが、国際協力の「出会いの場」を作ること。そこで、福岡市内で国際協力に取り組む学生団体に声を掛け、研修員が話した後、ワークショップを開くことになった。「いろいろな人の生の声を聞いてもらって、国際協力への一歩を

踏み出すきっかけを提供できればと思ったんです」。講演してもらったのは、九州大学歯学研究院が実施する「口腔健康科学教育コース」の研修員、クラウディア・パトリシア・ウマーニヤさん(ホンジュラス)とビブラ・カーテイ・ウイクラマシンヘさん(スリランカ)の2人。自分たちの身近な場所で、JICAの研修員を受け入れているという話を学生たちから知ってもらいたいと思ったからだ。研修員たちも「日本の学生と接する機会があるなんてうれしー」と、快諾してくれたという。そして本番当日。第1部では、研修員2人がそれぞれの国の紹介、研修の内容、日本に対する印象などについて話した。自分たちの想像を絶する開発途上国の現状、そして、そんな彼らの日本での研修に対する熱意に、参加者はじっと聞き入る。質問も次々に飛び交い、終了後のアンケートでは「もっと深い話を聞きたかった」という意見も出たほど。関心の高さがうかがえた。

続く第2部では、九州大学国際親善会など5団体がそれぞれの活動内容を紹介。フィリピンへのパソコン寄付、スタディーツアー、合同勉強会など、活動の形態はさまざま。参加者たちは「自分なりの国際協力」のヒントを見つけたようだった。

た。最初は人が来てくれるか不安だったというが、ふたを開けてみると、参加者は関係者を含めて約80人。イベントは大成功に終わった。インターン中は、実際に4つの研修コースを視察した山内さんと足立さん。「JICAの研修は、コースリーダー、研修監理員、JICA職員、研修実施機関など、さまざまな人の力で成り立っていることを知りました。日本で研修を受けた人たちも、私たちの財産でもある。これからも地域の中で理解者が増えるよう、周りに広めていきたい」と口をそろえる。

地域の特性や人々とのつながりから生まれる研修員受入事業。これからも、多くの研修員が日本各地で学ぶことにより、途上国の未来を担う大きな力が、はぐくまれていくことを願う。



イベントの実行委員の面々。山内さんが声を掛け、九州大学の11人が集まった。右端の前から山内さん、稲垣職員、当日は大分から駆け付けた足立さん